

# 小田嶽夫と郁達夫

——杭州との関連を中心に

陳 齡

はじめに

日本の近代文壇において、中国と誼の深い作家が幾人かいるが、小田嶽夫はその中でもとりわけ親愛の情を中国に寄せた一人と言えよう。雪国に生まれ、故郷の上越をこよなく愛し、また異国他郷の中国をも愛した。彼の作品は中国に題材を求めたものが多く、著書だけでもおよそ自作の半数以上に上る。そして、戦前、戦時下のあらゆる風潮にも左右されず、一貫して自分の文学態度を貫き通したことは彼が雄大な雪国に生まれ、また、青春時代の約四年（1924年8月～1928年5月）の歳月を中国で過ごしたことと無縁ではないだろう。日本文壇では陽のあたる作家ではなかった彼が<sup>1</sup>、中国での実生活をもとに創作した小説「城外」によって第三回芥川賞を受賞したことがあり、また、持ち前の人柄の良さと文学創作への情熱、篤実な作風が、多くの文学青年と真摯な友情を結び、少なからぬ読者を擁することを可能にした。一方、魯迅、郁達夫、郭沫若、蕭軍などの中国人作家とも交流があり、その作品の翻訳や紹介などといった文筆活動に情熱を傾けた。中でも郁達夫との係わりが最も深く、作品集『過去』の日本語訳による紹介を皮切りに、以後郁達夫について多く言及し<sup>2</sup>、晩年には中国国内でもまだ見られない伝記『郁達夫傳——その詩と愛と日本』（中央公論社、1975年3月）を情熱の漲る筆で綴り、郁達夫への特別な関心と愛着とを示している。現に近代日中文学者の交流は政治イデオロギーとの関連が完全に回避できない憾みがあり、国籍の違った者同士がある特定の歴史環境において、たとえ同じ文学者同士であっても克服できない阻碍が厳然として間に存在していたことは確かである。しかし、筆者が目したいのは、小田嶽夫と郁達夫の交友が他のケースと明らかに異なっているその点である。それは小田嶽夫は日本中がファナティックな戦争傾斜の風潮につつまれた中に身を置きながらも、戦争に対して極めて冷静で内省的な態度で臨んだことである。この態度は、彼と郁達夫との繋がりとは表裏一体をなすものだったと考えるが、本論では小田嶽夫と郁

達夫の交遊の軌跡を杭州との関連を中心に、文学——杭州——共感の順に辿ることによって、近代日中の緊張関係の中で疎隔となることは避けられないものの、心情の側に比重をかけて接近する近代日中文学者交渉の一形式を見、原因と背景を模索することとする。

## 一、 文学上の交渉と直接往来

小田嶽夫が郁達夫の文学にはじめて接触したのは、1932年春陽堂から「世界名作文庫」の一冊として郁達夫の短編集の翻訳を上梓しようとする計画を持ちかけられた時であった。「私は中国文学の専門家ではないが、どうにか中国の文章が読め、中国の現代小説を幾らか読んでいたところから、求められるままに今までに幾篇かの中国の小説を翻訳したが、その中で最初に（昭和七年）手がけたのが、郁達夫のものであった。」（「漂泊の中国作家」『宴』、1964年12月）と記していることから、郁達夫作品との出会いは単なる偶然によるものだったと分かる。そして、この『過去』と題する郁達夫の短篇訳集には「過去」、「春の夜半」、「一人行く」、「香奠」、「血涙」、「南遷」の短編小説六篇と「愛恋日記」の日記一篇とを収録しているが、代表作である短篇「沈淪」を省いている。「沈淪」は中国私小説の濫觴で、青年読者の間に旋風を巻き起こした画期的な作品であったにもかかわらず、小田嶽夫は翻訳にあたって、敢えてこの小説をはずした理由を「あまりに主観的であり過ぎ、しかも可なり冗長でもあるので、私は取らなかつたのであった」と説明している。これは、かつて私小説を否定し、私小説とは正反対の足場を創作上の理想とした小田嶽夫自身の文学観と相通するものだと考えられる。彼は「プロレタリア文学退潮」（『文学青春群像』南北社、1964年10月）の中で、こう言っている。「私は私小説というものをあまり好きではなかつた。（これはどこまでも好悪であり、肯定否定ではない）。ひとつには私はフロオベルに心酔した時代があり、彼の＜作者は作中に登場人物として出るべきでない＞という意味の主張に不知不識に影響されていたところもあったらしい。だが私小説でも葛西善蔵のもの——殊に『哀しき父』『悪魔』『子を連れて』『湖畔手記』などは好きであった。つまり私小説でもこういうリリズムのあるものなら好きなのであった」。このような私小説への主観的な感情的色彩が「沈淪」の取捨にも影響したのであろう。

また、作家としての郁達夫への言及が折りに触れなされているが、大方客観的な叙述にとどまり、中には批判的な見方を示しているものさえあるのである。

例えば、「郁達夫」(『支那人・文化・風景』竹村書房、1937年11月)という文章では、こう記している。

孤独、病弱、泥酔、性欲——さういふものから大方の彼の小説は出来上ってある。さういふ彼の作品がどんな色調を帯びてあるかは凡そ人には想像つくであらう。彼は極度に感傷家だ。が日本人の感傷よりはどこか振幅がひろい。それが彼の女々しい泣き声の背後に茫々たる支那平原を吹き通る秋風の嫋嫋たる音を感じさせる。……彼は支那には珍らしく、徹頭徹尾私小説作家、自伝小説作者であり、右のやうな特殊な性情環境にあったため、五卅事件以後殆んどあらゆる、国内の作家が続々と左傾してゆくのを切なく、いらだたく、歯ぎしりして眺め通した。やがて、彼のペンは衰へた。……彼は昨年(1935年)〈筆者注〉十一月三年振り目位に「出奔」と題する中篇小説を発表した。支那国民革命からの転落者を扱ったもので、嘗ての主観的、抒情的態度を捨てて、客観的叙事的態度に変わってゐることは分り、殊に初めの方は見違へる程悠々迫らない散文世界を現出してゐるが、中頃以後から人間がストーリーのために傀儡にされて居り、そのストーリー自身にも特に郁達夫らしいものは感ぜられず、彼のために取らない作品であった。……今はただ黙って彼を眺めることにしよう。

感傷家としての郁達夫の小説は「孤独、病弱、泥酔、性欲」といった特性を持つと述べた後、日本人より振幅のひろいその感傷の原因を中国大陸の社会実情に求めている。そして、私小説作家である彼は社会風潮と折り合いがつかず、一時停滞の時期も見られた中、「出奔」という多少余裕のある作品が出現したものの、作品の後半では、再びストーリー性のみを重視する郁達夫に対して批評の目が向けられている。ここで、小田巖夫は郁達夫の文学創作の限界性を見ているのである。つまり、郁達夫が本来の作風を捻じ曲げてまで歪んだ当時の文壇情勢に順応しようとする妥協の姿勢を暗に批判しているのである。

また、小田巖夫は『郁達夫傳——その詩と愛と日本』(前出)では、郁達夫の「春風沈酔の夜」(『創造季刊』第2巻第2期、1923年7月)について、作品では「私」の貧乏生活と陳二妹の苦しい生活を重ねさせてあるが、作者の意図は、彼女を酷使し搾取しているものは資本家だ、と表わしたいところにあるとし、「達夫は……しばしば国家・社会の腐敗、汚職に対して牢騷の言葉を吐くのだ

が、これまで攻撃の対象として特に資本家を挙げたことは無い。が、今度ははっきり資本家になっている」と述べている。また、「薄奠」（『太平洋』第4巻第9号、1924年12月）という人力車夫と「私」との交渉を書いた短編について、「この作品の書かれた年（大正十三年）、達夫の最も尊敬し、影響も受けた佐藤春夫が書いた主な作品をあげると『風流論』、『暮春挿話』、『売笑婦マリ』、『窓展く』などであり、又、達夫が好きであったはずの葛西善蔵の主な作品は『椎の若葉』、『湖畔手記』などであった。筆者の記憶するところではこれらのどの作品にも、被搾取に苦しむ人間などは現れず、達夫と兩人の間には似ている部分がかかなりありながらも、大きなところでははっきり違っていた。こういう違いはどうして起こって来たのだろうか。一言で言えばそれは日本と中国の国情の相違によるのだ……」としている。小田嶽夫は佐藤春夫や葛西善蔵の愛読者であり、「文壇にはマルキシズム文学という旋風が吹き荒れて、……政治文学ではない芸術派の文学は、ほとんど存在の余地をなくされていたのであった。私も、もちろん芸術派だったので、前途多難が考えられた。」（「人生を作る」『新潟日報』、1976年6月）と述べたように、彼自身がマルキシズム文学に一線を画していたことと考え合わせると、「春風沈酔の夜」と「薄奠」への上に見たような批評にはかなり否定的な見方が隠されていたことが推察できる。

以上に見てきたように、小田嶽夫が比較的早い時期に郁達夫文学を日本に紹介したにもかかわらず、その発端はあくまでも偶然性を伴っていた。また、文学者としての郁達夫に対しては、彼の文学は「孤独・頹廢」の特質を持つと述べたにとどまり、その原由を中国と日本の国情の相違に帰結させているが、明確な論断を避けている。一方、短篇「過去」（『創造月刊』第1巻第6期、1927年2月）に対しては、マカオを舞台に「私」が或る旧知の女性と邂逅し、別離する物語であると概略を説明する中で、「余韻深い、哀切を極め」、「達夫作品中第一等のもの」と作品に対して肯定的な意見も見られるが、大方の作品に対しては、客観的な事実関係を概説するなり、もしくは消極的な論評を下しているのみであることがわかる。

さらに、小田嶽夫と郁達夫との直接の出会いと言え、郁達夫が1936年来日した際の短かい期間の中の数回に限られている。

日本軍の山東出兵（1927年、1928年の2回）、満州事変（1931年9月）、上海事変（1932年1月）が立て続けに発生し、日中関係が暗転の一途を辿り、翌年の盧溝橋事件（1937年7月）に象徴されるような一触即発の情勢の中、1936年11月

福建省公報処主任の郁達夫は印刷機購入の理由で日本を訪れている。福建から10月に上海で行われた魯迅の葬儀に参列した後、船で長崎に渡り、東京へ向かう夜行列車の中から小田嶽夫に打電し、出迎えを要請した。東京帝国大学経済学部を卒業すると共に日本での留学生生活を終え、帰国して以来14年ぶりの日本訪問であった。一方の小田嶽夫はこの年杭州を舞台とした小説『城外』で芥川賞を受賞している。二人の間ではそれまでに手紙の往来はあったが、会うのは初めてであった。それまでの手紙の遣り取りとは以下のようなものである。

1、1932年、小田嶽夫が郁達夫の短篇訳集『過去』(前出)を上梓するにつき、その口絵にする写真の送付を手紙で求めたところ、郁達夫は妻と二人で映った写真を送ってきた。

2、1936年、小田嶽夫の「城外」が芥川文学賞を受賞した一報を受け、郁達夫は祝賀の手紙を送っている。この手紙に対し、後に小田嶽夫が意外な感を受けたと語っている。<sup>3</sup>

3、1936年、井伏鱒二は著書に『鶏肋集』という題をつけるに際し、先に郁達夫に『鶏肋集』の著があることを小田嶽夫から聞かされ、諒解を得る手紙を小田嶽夫に頼んだ。郁達夫は井伏鱒二に直接返信を出したが、その内容は、メーデルリンクとドイツの作家ハイゼの間に似たような話があったことにも触れた、好意的なものだった。

両者に係わる文献から、郁達夫が今回の来日以前に小田嶽夫との間で交換した手紙は以上が全てだと推定される。手紙の数や内容から見る限り、二人はお互いを熟知している間柄とは言い難い。郁達夫は他にも多くの日本人作家と面識があったのだが、手紙の遣り取りのみあって、まだ一度も会っていない小田嶽夫だけに出迎えの依頼をしている。この時東京駅で一緒になった二人はタクシーで麴町の万平ホテルに向かい、ホテルの一室に落ち着くと、話は日本文芸界のことで沸いた。以後、12月22日に日本を離れ、台湾へ向かうまで、郁達夫は小田嶽夫と数回会い、これは両者の数少ない直接的な往来となっている。従って、小田嶽夫と郁達夫は文学上の交渉、或いは直接的な往来のみから見るならば、莫逆の交りではなかったようだ。しかし、小田嶽夫は戦時中や戦後常に郁達夫の安否を気遣い<sup>4</sup>、晩年には心情溢れる筆で、郁達夫の一生を回顧した。また、臨終に際しては、「スマトラの郁達夫」を『海』に掲載(1978年7月)し、その悲愴な最期を惜しんでいる。そして、自分の好きな「西湖佳話」は「達夫が少年時代愛読した書物」であり、「若し将来『新西湖佳話』をつくる人がある

なら、もちろん郁達夫はその中の重要人物になるであろう」（「郁達夫と杭州・西湖」『文藝たかだ』、1975年7月）と語る。これらの作品から彼の郁達夫への愛着が随所に感じられ、郁達夫のことについて詳細に把握していたことが分かる。また、1936年晩秋、郭沫若の帰国抗日を策動する政治的使命を帯びたのではと周囲に疑われ、不信感を抱かせてしまい、後に佐藤春夫との決裂のきっかけにもなっていた福建省公報処主任として来日した郁達夫の身分に対し、彼なりの見方を示した。『文学青春群像』（南北社、1964年10月）において、「……郁との交りは、どこまでも国境を超越した一人の人間と人間のそれであるように考えていた。郁は福建省の公報処主任という位置にはいるが、それとていわば彼のアルバイト的閑職であり、もともと政治に関与することがきらいで、殊に近年は風流に逃避している観さえもある……」とし、また「……郁達夫又福建省に隠遁し……」（「最近支那芸術界の報告」『日本評論』、1937年5月）の記述や「彼の役所入り」は「大して仕事もしていない」郁達夫を助けるための福建省長陳儀の好意によるものだとすることなどから、その政治との関連が薄いとの考えを示した時期があった<sup>5</sup>。つまり、郁達夫の来日の非政治性を立証できれば、彼は決して日本の敵ではないという考えが成り立つという小田嶽夫の思惑が潜んでいる。これは当時の風潮の中では僅少の考え方であり、郁達夫への深い思いが背景にあるが故のことだと考えられる。ここで、小田嶽夫と郁達夫との交遊のケースにおいて、文学者としての交渉や直接的な往来より、実はもっと素朴な要因が働いたのではないかと考える。それは両者が共に杭州という町と深く関連していたことである。以下に郁達夫への心情世界において、小田嶽夫が自らと杭州との因縁関係を強く意識すると共に、意図的に郁達夫を杭州と結びつけていることなどから、杭州への情動的要素を見、杭州が両者の交渉において大きなウェイトを占めることに注目したい。

## 二、 杭州に結ばれた心情——杭州と郁達夫と小田嶽夫

### 1、杭州と小田嶽夫

小田嶽夫は後年自ら綴った「郁達夫と杭州・西湖」（前出）一文の中でこう記している。

私の「郁達夫傳」について、或る人が「あれは杭州を書きたくて書いたようなものじゃないかね」と言ったことがあり、私は「ウフフ」と笑いで

答えたが、少くとも杭州が大分書けることがあの作品を志した動機の一つであることは事実である（そして杭州に触れているときに、書いていてもっとも楽しい時であった）。ということは郁は杭州と非常に関係の深い人で、杭州が舞台になることがしばしばあるのであった。

『郁達夫傳』を書いたのは杭州が多く書けるからだというふうにも受け取れる言説である。一笑に付すことで、返答をばかす小田巖夫の胸中には杭州への想念が隠されていることが察せる。小田巖夫と郁達夫との関係において、杭州が一つの重要な手がかりと考えられるが、では、小田巖夫は何故杭州にそんなに拘るのか。杭州を「書いていてもっとも楽しい」理由は何なのか。杭州と郁達夫との関係はどうなのか。以下に杭州との関係を彼自身の杭州体験と彼の視点から捉えた郁達夫と杭州の関連から明らかにする。

#### ①青春流離・文学立志

小田巖夫は明治33年（1900年）新潟県高田市（現上越市）に生まれ、大正11年（1922年）東京外国語学校（現東京外国語大学）支那語科を卒業後、昭和5年（1930年）まで外務省に勤務した。卒業してまもなく昭和3年（1928年）まで中国杭州領事館に外務書記生として赴任し、後にこの杭州ないし杭州での体験をもとに数多くの作品を残している。ざっと挙げれば、次のようなものがある。「西湖」（『セルパン』1932年8月）、「居留地の話」（『麒麟』1933年5月）、「春・西湖・流離」（『中外商業新報』1936年3月）、「城外」（『文学生活』1936年6月）、「ばのらまH城市」（『文藝』1937年1月、後「杭州城図絵」に改題）、「杭州と西湖」（『アサヒグラフ』1938年1月）、「西湖夜話」（『揚子江』1939年5月）、「西湖湖畔抄」（『大陸手帖』1942年5月、竹村書房）、「杭州西湖と西湖物語」（『文学散歩』1961年8月）、「杭州西湖畔で——蔵原伸二郎との出会い、『葡萄園』転々」（『文学青春群像』1964年10月、南北社）、「青春流離」「杭州彷徨」（『漂泊の中国作家』1965年2月、現代書房）、「南宋の旧都杭州のこと」（『図説中国の歴史第五巻月報』1977年5月、講談社）等々。これらの作品では、杭州や西湖の景致の優美をはじめ、作者小田巖夫の杭州での生活体験が克明に描かれ、杭州の地における孤独・愛欲・文学への耽溺といった小田巖夫の自我成長のプロセスの一端を見て取ることが出来る。なかでも「城外」という作品が杭州を舞台に作者自身と見られる主人公が現地の使用人「桂英」との肉欲関係を中心に、赴

任先の大使館の領事に対する無邪気とも言うべき正義感からの反抗や、国民革命軍の進撃という歴史的な大事件が発生しているにもかかわらず、風光明媚な杭州城外の風景に心酔するなど、全体は恬淡とした筆致でエキゾチックに描いている。小田嶽夫はこの作品によって佐藤春夫や伊藤整などの擁護を得て、第三回芥川賞を受賞し、一躍作家に比肩する地位を確立した。この意味で、杭州は作家小田嶽夫の文学生活において、その文学的感性と機知を育み、彼の文学の基盤をなした原点とも言うべき重要な地であると位置付けられよう。

## ②小田嶽夫の愛した杭州の自然と風土

小田嶽夫は後年杭州を振り返って、その美しい景観をこう述懐している。

毎年春になる度、なつかしく思ひ出されるのは支那の西湖である。そのほとりに私は三年餘り住んでゐたことがある。……湖の景色と言へばすぐにわれわれに思ひ起させがちな芦ノ湖や中禪寺湖にあるような、あの幽邃森厳な感じとはまるでかけはなれた、悠々と長閑な、いかにも春景色にふさはしい感じのものであった。（「春・西湖・流離」，前出）

その白堤の並木の楊柳が、春の微風に真綿のきれはしのやうな柳絮をへんぼんと宙に舞ひ乱れさせれば、髪のやうになびく柳の葉、広闊な水、山の緑と照応して、天下の春ここに尽きる。（「杭州城図絵」，前出）

外務省亜細亞局第一課に勤めて間もない1924年、小田嶽夫は中国杭州領事館に書記生として赴任することを命ぜられた。しかし、3年以内に帰国できないことや、「中国よりも何よりも文学に心が向いていた」が故にその辞令を渡された彼は「煩悶した」。一方で、「杭州は南宋の旧都で、世界的に名高い西湖のほとりの町ではあり、異境生活の経験も何かのプラスになるかも」（「青春流離」，前出）という純粋な思いに駆られ、彼は赴任の途についた。しかし、「……私は私自身をエキザイルと感じてゐない日は一日も無いと言っていい程であった。……ただ一人語るべき友もなく、ぼつねんと荒れ果てた官舎の二階に坐して、秋風の底知れない寂しい音にきき耽らねばならない……」（「春・西湖・流離」，前出）と彼が記しているように赴任先の生活は極度な孤独と寂寥を伴っていた。幸い、領事館は西湖の一望できるほとりの崖上にあり、煩雑な書記生の仕事か



ら彼を救い出し、癒したのは彼が愛した西湖の美しい景色であった。そして、彼の筆は『西湖佳話』にも及んだ。杭州で役人をしていた白楽天、蘇東坡の話。西湖畔に梅を妻に、鶴を子供にして、終生独身でいた隠遁詩人林和靖の話。侠妓と言われていた才色兼備の蘇小小の話。上田秋成の「蛇性の淫」のもとになっている「雷峰怪迹」など、そのリリックな筆致からこうした民間に伝承された杭州に纏わる様々な美談が美しい景致と共に常に彼に深い感動を与え、彼を縹渺夢幻でロマンティックな世界に導いたことが分かる。また、彼は後年『郁達夫傳』（前出）において、郁達夫の少年時代の愛読書として『西湖佳話』を挙げ、「西湖はただ景色を眺めるだけでなく、それらの物語の情趣に浸るところでもある」と叙述し、郁達夫の杭州への思いに共感を示している。また、彼はこうも語っている。

杭州は緯度から言うと鹿児島ぐらいのところであり、わが故郷の越後などよりずいぶん南に位置している。そして、西湖は非常に軟かみ味を帯びた、明るい景観であった。高田のうす暗さとは対照的であった。北方の人は瞑想的で、南方の人は感覚的だ、とよく言われるが、……私は杭州在住中に私の内に乏しかった感覚的なものを幾らかは身につけたようである。私は杭州にいる間じゅう島流しにされたような気持ちでいたのだが、このことだけは作家を志す私にとって幸いであった。（「郁達夫と杭州・西湖」、前出）

杭州の美しい山水、古都の風韻は大使館の官員とは言え、常に流離する異邦人の感覚を抱いていた小田嶽夫には測り知れない心の糧となったことであろう。そして、『西湖佳話』に登場する数多くの美しい伝説はすでに文学立志に目覚めた彼に多くの新鮮な刺激を与え、文学青年への志向をより強固なものにしたと考えられる。故郷高田の自然景観が小田嶽夫に瞑想的な性情を培ったとするなら、異国杭州の柔和で明快な風景とロマンに満ちた様々な美しい伝説は彼の感覚の一面を補ったと言えよう。そして、その感覚を一層豊かにしたもう一つの出来事も看過できない。桂英と幽琴との出会いである。彼の後年の作品に度々登場するこの二人の現地女性との感情交流は彼と杭州ないし中国との関係を見る上で重要な出来事と言える。

### ③小田嶽夫と桂英・幽琴

異国での孤独と悲涼な生活を強いられる中、小田嶽夫は風姿も身分も異なる二人の女性と巡り会った。一人は女中の桂英で、もう一人は友人の娘の幽琴である。女中桂英との愛欲生活は後の芥川賞受賞作品「城外」にリアルに再現され、本格的な文筆活動への契機をもたらしたと言え、幽琴との精神恋愛の結末は彼の文学への志望をより高めさせ、棄官従文の決意に一層現実性を帯びさせたと言える。

#### ・「ヒューメンな愛」

桂英は江蘇省の蘇州に生まれ、酒好きで怠け者の亭主に愛想を尽かし、日本領事館で女中渡世をするのだが、文盲とは言え、聡明で、「清廉な気持ちの持ち主」であるため、領事館内の日本人、中国人の大方から愛されていた。小田嶽夫自身と見られる主人公の「私」にとって、当初単なる肉欲を満たしてくれる存在であったが、生死を彷徨う病魔から桂英を「私」が献身的に救い出したことから、「私」の彼女への愛が一気に「昇華」した。

その日頃の私は全く肉体的に欲求から解放せられて、ひたすら精神でかの女を愛してみた。かの女の生命力にたいして何か合掌したいやうな気持でさへあった。その精神の状態は長い間つづいた。その間ちゅうは私は桂英を愛することに、一点の疚しさも感ぜずに済んだし、他人の目の前に於てもはばかりなく私の愛を行為に移すことが出来た。それは個人的な愛を超えたヒューメンな愛の性質を多分に含んでみた。その間ちゅう私は清らかな静かな興奮で生きてみた。私自身はその期間の自分の幸福をそれ程明確に意識してゐなかつたが、おそらく私が長い生涯を送ると仮定して、その旅の最後の終りに過ぎてきた跡を追懐して見る時があるとするならば、その一時時生活は崇高な燦爛たる金色を放って私の瞳を眩暈させるかも知れない。（「城外」，前出）

「異邦人の寂しさ」に加え、領事との軋轢から、ひたすら苦境に立たされていた小田嶽夫にとって、身の回りを何一つ疎漏なくかいがいしく世話してくれる桂英の存在は単なる侍従ではなく、心身の拠りどころでもあったのであろう。彼はやがて、良心の呵責に苛まれながらも、彼女との不倫に惑溺していくのだが、彼女が生命の危機に曝されていたのを全力をかけて救ったのがきっかけで、

「私」の中の主人としての「日本人の意識」が「消え失せ」る。そして、その「ヒューメンな愛」が達成されつつあるうちに、「私」の帰国が決まり、これに先立って去っていく「桂英母子のゐない官舎はなぜかも早私の住居ではない」「冷たいもの」に感じられていた。桂英との交流は小田嶽夫の杭州赴任の全過程に関わる出来事である。桂英と住んだ官舎は言わば、小田嶽夫の中国での生活現場であり、異国体験の基軸にもなっていると言える。そして、桂英への愛の「昇華」は彼の意識領域では中国の一般民衆への普遍愛にも繋がることを意味するのであろう。

#### ・棄官従文の契機

異郷への流離の寂寥に堪えかねて、麻雀に通う友人の家で小田嶽夫が幽琴を知った。「名前のように幽玄な感じがあり」、「古風なおっとりした人柄」に魅せられた小田はやがて彼女にプロポーズするのだが、一方、心は文学と恋の狭間で激しく揺れ動いていた。そして、その葛藤を彼は次のように表現している。

ああ、彼女を私の妻にすることが出来るなら……私はいつのまにかそう考えはじめていた。日本へ帰ったなら、出来るだけ早く勤めを止め、文学ひと筋の生活にはிரりたい、そのためには赤貧の生活も覚悟しなければならぬ、とはかねて私の考えていたところであった。が、彼女と結婚したらどうだろうか、……私は勤めを止めることは出来ない。文学への望みは捨てないとしても、それは半ば趣味的なものになり、文学生活を営むことは断念しなければならなくなる。文学者になれるかなれないかは別として、とにかくそれに志すことを止めるのだから、私にとっては深刻な問題である。文学の道が最善で、外務省官吏の道が次善であるというなら、まだしも話は簡単だが、私は外務省官吏生活にたいしては否定的なのだから、ことは一層容易でない。外務省官吏生活にたいして否定的なら、それこそ事は簡単ではないかとも見られるかも知れないが、幽琴を妻にすることが出来るならば、敢てそれは忍ぼうという気持もあるのだから、始末にいかないのであった。文学か恋か？私はその岐路に立って、迷いに迷った。

（「青春流離」，前出）

この結婚話は、日本に生活基盤を置くことを考えていた小田嶽夫の意思に反

して、「永久に中国で暮らす」という幽琴家当主の条件によって決裂に終わった。文学での立身を目指し、貧困生活も覚悟していた小田嶽夫は幽琴との婚姻を念頭に、文学を割愛してもいいとまで考えていただけに、この恋の収束に小田嶽夫は「転輾反側の苦しい幾夜」を過ごし、限りない悲しみに陥った。しかし、彼は帰国してまもなく外務省を辞任し、安穩な外交官の道を捨てて貧乏文士の道を選んだ。そして、貧困のどん底も経験した。幽琴との恋の結末は彼が激しく葛藤していた文学と恋の矛盾から解放させ、文学に専念する道を進むことを決意させる結果となった。この意味では、幽琴との恋は彼の棄官従文への選択に決定的な要素をもたらしたことになったと言える。

28年後、小田嶽夫は中国を再訪した時、桂英と幽琴の足跡を辿らずにはいられなかった。西湖に舟を浮かべ彼はこう記した。

急に西湖にはげしい未練の情がわいて来た。西湖の水に顔をつけて接吻したいような気持になった。が、私は接吻する代りに、指を水のなかへ差し入れた。やわらかく、あたたかく、何やらくすぐるような感じ。そうしていながら私はしづかに目をつぶった。森閑とした静寂さのなかに、水を切る櫂の音だけが、規則正しい間隔をおいて、何ごとか甘い密語を囁くように忍びやかに鳴っている。……あたたかいしづかな陽射し、澄んだ、ひろい空、やわらかく、真っ平らな、青びろうどのような水、しかもこの水には私の若い日の魂がとけ込んでいる。（「杭州彷徨」、前出）

杭州への想いには西湖の景観への陶醉と共に二人の異性への情思が内包されている。彼は桂英や幽琴との再会が果たせなかったものの、西湖の寛闊な胸に抱擁された。そして、西湖の水に再び、桂英と幽琴そして昔日の自分の面影を見出したのであろう。

## 2、杭州と郁達夫

杭州は郁達夫にとっても縁の深い町である。郁達夫の出生地である浙江省富陽と地理的に近いこともあり、1911年2月、16歳の郁達夫少年は杭州の中学に入学した時以来、彼は人生の様々な思い出をこの町に残した。文学創作、恋愛、家庭生活、そして世間を喧騒させた王映霞との離縁、彼はこの町で人生の多くの歓喜を味わったと同時に苦渋も嘗めさせられた。晩年南洋に漂泊した際、彼

は偶然「杭州」と名のついたレストランが目につくと、夜眠れないほどノスタルジアに掻き立てられたという。郁達夫と杭州の関係について、小田巖夫は次のように語っている。

彼の杭州との関係は三つの時期に分けることが出来る。その第一は、中学時代を杭州で送ったこと。第二は、王映霞との恋が杭州の西湖を舞台にクライマックスに達したこと。第三は、彼が後年上海から居を杭州に移して、文壇をよそに悠々とした生活を送ったこと。(「郁達夫と杭州・西湖」、前出)

三つの時期から郁達夫と杭州の関係を要約しているが、いずれも適確に捉えていると言える。まず、第一の時期に関して言えば、郁達夫が「自述詩」の「児時嘗作杭州夢、初到杭州似夢中、笑把金樽邀落日、綠楊城郭正春風」に初めて杭州に着いた時の情景と心境を詠んでいる。また、『自伝』<sup>6</sup>（「遠一程、再遠一程——自伝之五」、「孤独者——自伝之六」）によると、中学時代は杭州で数多くの本を手に入れ、特に『吳詩集覽』、『庚子拳匪始末記』、『普天忠憤集』が彼に最も大きな影響を与えている。更に、この時期から「浙新公報」、「之江日報」、「神州日報」に自作の詩を寄せるようになり、着実に文学の道を進み始めたのである。したがって、小田巖夫にしても、郁達夫にしても杭州は文学との関係においてその自覚を促す契機たる地であったと言える。

また、第二の時期は年代的に小田巖夫の杭州領事館生活と重なる時期だが、面識がないため、往来がなかった。後年の小田巖夫の文章にはこういう記述が見られる。「達夫は……杭州にいたが、その間毎日映霞の家族と一緒に、或いは映霞と二人だけで、西湖上や西湖周辺を遊びつづけた。……同じ時期に筆者は杭州領事館員として杭州に居住していた。若年独身の無聊のままに、ひまさえあれば西湖に舟を浮かべたり、湖辺を逍遥したりしていた。当時私は達夫については僅かにその名前を知っている程度でしかなかったが、……ひょっとしたらどこかで達夫の一行を見かけるか、すれちがっている、というようなことがあったかも知れない。そしてこの時の達夫は幸福の絶頂にいたのだが、私は懐郷の念やる方なく、無聊と寂寥に悩まされている身であった」。(「郁達夫と杭州・西湖」、前出) 自分自身の杭州への思いを重ねて、同時期の郁達夫の杭州での「逍遥」を想像した一節だが、同時に杭州でのすれちがいを惜しむ小田の気持ち

が言表に溢れ出ている。

第三の時期、郁達夫は王映霞と郷里杭州に移住し、そこで土地の名士と交わり、山水に遊び、隨筆、紀行文を執筆した隠棲的とも映る時期である。つまり、小田嶽夫が指摘するところの「魯迅が隨筆にひそみ、郁達夫が紀行文にかくれ、郭沫若が實際運動に転じ」という文人が「殆んど創作の筆をとってゐないやうな」時期で、その原因は、「検閲がきびしくて、自由に文章が発表できなく、「混沌乱脈の支那国情」に反抗しようとしても、「血の出るやうな叫びがさう長い間つづくものではない」とし、佐藤春夫や谷崎潤一郎などの日本の近代作家とは違い、「余裕といふものとは縁の遠い存在」であると分析した時期である。（「支那作家と人生的情熱」『中国文学月報5』、1935年7月）

文学へのスタートの地点、杭州で繰り広げられたロマンス、杭州の景致への陶醉など、両者には似通った若き日の哀歎があるが、郁達夫に対する小田嶽夫の心情世界において、常に杭州という町への想念が揺曳しているように看取できる。つまり、小田嶽夫の郁達夫への心情はそのまま杭州という地縁への想いでもあり、杭州への愛着が背景にあると考えられる。杭州という共通の体験の場から連帯感が生じ、それが自ずと親しい心情へと移行して行ったのではなからうか。

### 三、中国民衆への共感——倫理人としての小田嶽夫

小田嶽夫は戦時中、戦後において一貫して反戦の姿勢を貫いてきた。「戦争と私」<sup>7</sup>において、「昭和十二年中国と戦端がひらかれたさい、私は非常にユーウツな気分になった。……戦争というものを嫌悪したのであった。その頃私はある友人と話していて、談たまたま日中戦争に及んだとき、〈日本などはべつに強大にならなくていいんだ、風光明媚なところではあるし、スイスのような国になればいいんだ〉と言った。これは私のそのときの偽らない気持ちであった」と語っている。そして、その理由について、「私は二十代に三年半ほど中国に住んだことがあり、中国人には非常に親愛な気持ちを抱いていたので、敗戦中国の人民が塗炭の苦しみに陥っている様を思うと、胸が痛んだ。……中国にたいして心底からの敵意が燃えて来ない状態であった」と述べ、さらに、そのような心理状態は自分だけではなく、大方の日本人はみんなそうであると言っている。また、日本の敗戦を踏まえ、日本が負けたほうが日本や世界の平和のためにもなるとしたながらも、そういう真実に対し、戦争中に予知しなかった先覚

の明の無さと「スイスのような国になればいいんだ」という考えを、信念として持ち続けなかった個人としての脆弱と盲従に対し、厳しく自己剔抉の姿勢を見せている。このような戦争観は彼が若き日中国で体得した学生達の反戦運動と密接に関係すると思われる。

1919年、パリ講和会議で山東省の旧ドイツ利権の日本譲渡が承認され、日本の中国干渉が日増しに拡大する中、1925年の「5・30事件」に伴い、中国各地で学生の排日運動が高揚した。当時、杭州の大使館官員として、小田嶽夫はその反抗運動を日々目のあたりにしていた。

(大使館のある)〈筆者注〉崖下の道で止まると彼等(学生達)〈筆者注〉はそこで異口同音に、「打倒帝国主義」とか「廃除不平等条約」とか「收回租界」とかの標語を叫ぶのだったが、勢ひあまって小旗はしきりに崖上の領事館構内へ投げ入れられ、又小石が中の建物へ飛び入り、僕はその叫喚と狼藉の中で嘗て知らない複雑な悲みを覚えたものであった。(「支那人世界」『支那人・文化・風景』、前出)

私は息をひそめて行列の足音、斉唱、小旗の音を聞き入っていたが、ふと私の臉に涙があふれた。なんのための涙か私にはわからない。中国学生たちの愛国の情熱に感動したのかもしれない、そうではなくて自身何か悲壮感を覚えたためかも知れない。私はもうそれ以上そこにいられなくなり、手の甲で涙を払うと、急いで事務室へもどった。……私は学生の闖入して来るのを待ち構える姿勢でいた。私は思った——私は彼等を憎んでいない、むしろ愛している、と。そう思うと私の心は安らいだが、すぐにその平安が崩れた。——「何を言ってやがるんだ、お前は帝国主義の日本国家から派遣されて来ている官吏ではないか！」そういう声がどこからか聞こえて来た。私はそれに違いないと思った。しかも私が中国人を愛していることに偽りは無い、と私は思った。私はその矛盾に苦しんだ。私は彼等にどう言えばいいかわからなくなった。(「青春流離」『漂泊の中国作家』、前出)

中国青年の抵抗運動に同情し、理解を示しながらも、日本帝国主義の手先であるという蔽えない矛盾に茫然自失する小田嶽夫の姿が歴然と伝わる。この悲

壮な気分には彼が杭州で過ごした日々が凝縮されているように思われる。そこには、彼の異国への流離の悲哀、文学への渴望、桂英・幽琴への思慕、中国民衆への共感と同時に他でもなくその反抗の対象である日本国民の一個人としての儚さともどかしさが錯綜し、複雑に絡んでいるのであろう。このような対中感情は郁達夫との交渉にも色濃く反映されているように思われる。

彼は「中国文学」の文化消息欄から、郁達夫惨死の消息を受け、「私は何ともいえない暗い、切ない気持を覚えさせられた」と心情を吐露し、「私は日本と中国が干戈の間にまみゆるようになった後も、たとえ氏が愛国の至情から抗戦の情を燃やしたことはあったにしても、氏の心の心底は戦争には堪えられなかったのではないかと想像される。氏が中国新文学界の大先駆でありながら、本国の重要都市にとどまらず、南方僻遠のシンガポールあたりに働く部署をもとめたりしたことあたりにも私には何か氏について戦争忌避らしいにおいが感ぜられるような気がするのである」（「郁達夫氏を惜む」第一新聞社，1947年6月13日）と郁達夫の南方移転に彼なりの弁護の心情を示している。

現に郁達夫はシンガポールで「星洲日報」の主筆となり、抗日宣伝に健筆を振ったのであるが、小田巖夫にして見れば、それは「愛国の至情」がとらせた行動だと受け止められている。この愛国の情は、嘗て、若き日の彼自身が中国杭州の西湖湖畔ですでに身を持って体験したものである。帝国主義時代の日本国民として、様々な感情の葛藤があったものの、彼は生々しい感動と情熱を以って、中国青年の愛国の現場に臨んだ。彼が後に戦争に対し常に冷静な倫理人でいられたのもこの若き日の体験と密接に関係するのであろう。そして、これは彼も一個の真の愛国人であることを意味するのである。つまり、真に自国を愛せる人こそ、始めて他人の愛国心が理解できるということである。しかし一方、彼はやはり郁達夫が抗日戦士になることを望んでいない。これは彼自身の戦争嫌悪と軌を一にすることである。彼の郁達夫への心情はこういった彼自身の反戦姿勢と愛国感情と一脈相通ずるものだと言えるのである。

終わりに

1949年、中華人民共和国建国大典の日、北京にいた小田巖夫はその盛況を目の当たりにした。天安門前の観礼台から天安門樓上に建国のリーダーたちの中に郭沫若の姿を確認できたとき、彼は感慨無量の心境を抑えられなかった。彼は郭沫若の栄光を心から喜びながら、ふと「言いようのない哀切な気分」に陥ら



された。……若い日に郭と共に浪漫主義文学の団体（創造社）を起し、郭と並んでその双璧として謳われた郁達夫の、終戦直後のみじめな死を、私は思い出していたのであった。郁が今日生きていて、この中華人民共和国にいたとしても、政治に興味を持たず、又イデオロギッシュの小説を好まない彼であって見れば、おそらくどこか適当な閑職的位置で、ひそやかに生きていることであろう。そしてそれはそれで自然なことなので彼がこの国に生きていさえすれば私にはそれほど深い感慨は無かったかも知れない。が、郭が天安門樓上に赫赫と輝いているのに比して、彼があまりにも悲惨な最期をとげている——そしてそれが日本の侵略主義に基因していることを思うと、私の心は茫洋とした悲しみの海へ、さ迷い出さずにはいられないのであった。」（『漂泊の中国作家』『宴』、前出）

建国の祝典で聳く夥しい数の中国民衆の中にぼつんとする一人の外国人——小田嶽夫、このとき彼の胸中には歓喜に酔いしれた周囲の群衆には決して知れない複雑な思いが去来した。彼はいまやさまざまな栄光を一身に集め、億万民衆に讃えられる時の人郭沫若のために心より祝福している一方、中国革命と中国文壇変革の疾風怒濤の中で共に戦い、共に浮沈した郭沫若の良友、亡き郁達夫を思い出さずにはいられなかった。二人は共に嘗て日本と縁を持ち、また自分とも親しく交友しただけに、そのかけ離れた運命の有様に心が激しく揺れ動いた。そこに秘められているのは、戦い抜いてきた幸運な郭沫若への羨望と拍手ともう一人の友人郁達夫の呆気ない終末への痛恨と愛惜の念であった。そして、彼が郁達夫に対して抱いているのは「赫赫と輝」かなくても、せめてどこかで生きてほしい、たとえひそやかに黙々としても、それは本来文学者である郁達夫に最も適合した生き方なのだという切ない願望であった。

小田嶽夫の郁達夫への深い心情が浮き彫りになっている。そして、本論はその心情の所以について、両者の直接的な往来による交渉よりも、小田嶽夫・郁達夫と杭州との関連を中心に、文学・杭州・共感をキーワードに間接的な検証に重きを置いて試みた。また、郁達夫側からの言及に関わる資料が乏しいため、主に小田嶽夫側に視座を据えてきた。小田嶽夫は晩年において、「郁達夫の恋」（『歴史と人物』、1973年3月）や「スマトラの郁達夫」（前出）など郁達夫を追慕する文章を多く執筆している。この郁達夫への並々ならぬ友情には彼が若き日杭州での生活、文学と恋愛の葛藤、そしてそこで日々体得した中国民衆への認識と共感が色濃く投影されているように思われる。彼は杭州を愛し、また杭

州と縁の深い郁達夫も愛せずにはいられなかったのではないだろうか。

---

1 小田嶽夫には数十冊かの単行本の著作があり、二回にわたり文学賞を受賞（1936年「城外」で第3回芥川賞を受賞、また、1975年『郁達夫傳』で平林たい子賞を受賞。）したにもかかわらず、文壇では提起される機会は多くなかった。紅野敏郎氏はこのことに触れ、次のように語っている。「本来ならば小田嶽夫全集、あるいは選集が編まれて然るべき人なのだが、現在の出版界はそういう企画に乗ろうとはしない。中国の問題、旧満州の問題など提起する人はいても、小田嶽夫を真正面からとりあげる人はきわめて少ない。誠実な文学活動をしているのに、一般的な人気がないためか、陽のあたらず作家には、昭和文学の研究者は意外に冷淡で、そういう作家にこそ力を傾中すべきはず、と思うことがしばしばある」。（「小田嶽夫——『城外』『泥河』など——」『国文学解釈と鑑賞』、2000年12月）

2 例えば、題名から分かるものでも以下のように挙げられる。①「郭沫若と郁達夫——『創造社』の二詩人」（発表誌未確認、1937年～1938年）②『采石磯』と郁達夫（『揚子江文学風土記』龍吟社、1941年12月）③「郁達夫氏を惜む」（第一新聞社、1947年6月）④「動乱中国の二作家——郭沫若と郁達夫」（『新生』1948年4月）⑤「郁達夫の恋」（『歴史と人物』中央公論社、1973年3月）⑥「郁達夫と杭州・西湖」（『文藝たかだ』1975年7月）⑦「スマトラの郁達夫」（『海』1978年7月）等々。

3 「漂泊の中国作家」には次のような記述が見られる。「郁達夫が杭州へ移ったと思われる頃から三年ほどあと、私は思いがけなく彼から一通の書信をもらったが、それは私の作品「城外」が文学賞を受けたことにたいする祝いの手紙であった。」等。

4 井伏鱒二の「小田君についての点描」（小田三月編『小田嶽夫著作目録』青英舎、1985年6月）によると、ビルマに徴用された小田嶽夫が戦況の推移により、マレー半島に撤退して、シンガポールで井伏鱒二と会ったとき、「ときに、郁達夫はどうしてゐますか。丈夫でせうか。彼はシンガポールで週刊誌を主宰してみた筈ですが」と気遣ったと言う。また彼の著した一連の郁達夫関係の作品からも終戦前後常に郁達夫の安否を気にかけていたことが分かる。

5 但し、この考えには一貫性に欠けるとと思われる記述も見られる。例えば、「そんな考えは甘いものだった、ということ、私は間もない時期に気付かき

れた」(『文学青春群像』)との記述や「日支事変と支那の文士」(『新潮』1938年8月)に「嘗って『創造社』の双璧として郭と並び称せられてゐた郁達夫は、近年頗る創造力を失ひ、福建省長陳儀との私縁によって福建省政府の碌を食んで時たま風流の文章を發表してみたに過ぎなかつたが、この郁達夫が新聞消息によると、徐州陥落直前に徐州を訪れてみたらしい。どういふ用務で行つたのかは勿論知る由が無いが、彼の場合は多分国民政府役人としての訪れかも知れない。」との記述などから、その考えが動揺した時期もあつたことが分かる。

6 郁達夫の自伝は八篇から構成されている。それぞれ「悲劇的の出生—自伝之一」(『人間世』第17期, 1934年12月5日)「我的夢, 我的青春!—自伝之二」(『人間世』第18期, 1934年12月20日)「書塾与学堂—自伝之三」(『人間世』第19期, 1935年1月5日)「水樣的春愁—自伝之四」(『人間世』第20期, 1935年1月20日)「遠一程, 再遠一程!—自伝之五」(『人間世』第21期, 1935年2月5日)「孤独者—自伝之六」(『人間世』第23期, 1935年3月5日)「大風圏外—自伝之七」(『人間世』第26期, 1935年4月20日)「海上一自伝之八」(『人間世』第31期, 1935年7月5日)となっているが、この他、「雪夜—自伝之一章」(『宇宙風』第11期, 1936年2月)も見られる。本稿の参照は『郁達夫文集』(生活・読書・新知三聯書店香港分店&花城出版社 1982—1985年)に拠る。

7 この資料は小田嶽夫のご子息の小田三月氏のご厚意を蒙って、閲覧できたのだが、出典が不詳となっている。

#### 参考文献：

- 1、小田嶽夫著『郁達夫傳——その詩と愛と日本』(中央公論社, 1975年3月)
- 2、小田嶽夫著『漂泊の中国作家』(現代書房, 1965年2月)
- 3、小田嶽夫著『三笠山の月』(小沢書店, 2000年9月)
- 4、小田三月編著『小田嶽夫著作目録』(青英舎, 1985年6月)
- 5、小田三月編著『小田嶽夫著作目録・補遺』(青英舎, 1991年6月)
- 6、郁達夫著, 小田嶽夫訳『過去：外六篇』(春陽堂, 1932年8月)
- 7、小田嶽夫著『城外・夜ざくらと雪：小田嶽夫作品集』(青英舎, 1980年6月)
- 8、小田嶽夫訳『同行者：支那現代小説三人傑作集』(竹村書房, 1938年6月)

- 9、小田嶽夫著『文学青春群像』（南北社、1964年10月）
- 10、小田嶽夫編『現代支那文学傑作集』（春陽堂書店、1941年7月）
- 11、小田嶽夫著『支那人・文化・風景』（竹村書房、1937年11月）
- 12、小田嶽夫著『大陸手帖』（竹村書房、1942年5月）
- 13、小田嶽夫著『回想の文士たち』（冬樹社、1978年6月）
- 14、小田嶽夫・武田泰淳著『揚子江文学風土記』（1941年12月）
- 15、小田嶽夫著『城外』（竹村書房、1936年11月）
- 16、小田嶽夫著「戦争と私」（出典不詳）
- 17、小田嶽夫著「郁達夫氏を惜しむ」（第一新聞社？紙名不詳）
- 18、小田嶽夫著「郁達夫と杭州・西湖」（『文藝たかだ』1975年7月）
- 19、小田三月著「郁達夫と日本」（『季刊文科』第2号、1996年12月）
- 20、伊藤虎丸・稲葉昭二・鈴木正夫編『郁達夫資料』（1969年10月）、『郁達夫資料補篇(上下)』（1973年3月、1974年7月）
- 21、『郁達夫文集』（全12巻、生活・読書・新知三聯書店香港分店&花城出版社、1982～1985年）
- 22、『中国文学月報』1～5巻、別冊（汲古書院、1935年2月～1971年3月）

#### 付記

本稿の作成に際し小田嶽夫のご子息である小田三月氏より資料のご提供を、名古屋大学の中井政喜先生と愛知文教大学の大槻信先生より多くのご指導をいただきました。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。